OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新宗教における二段階の英語化 : SGI-USA の事例から
Author(s)	川端, 亮
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2010, 36, p. 39-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9416
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

新宗教における二段階の英語化

－SGI-USA の事例から－

川端　　亮

目　次

1. はじめに
2. SGI-USA の発展の過程
3. 翻訳の重要性再考
4. 翻訳の 4 つのレベル
5.「日本語が透けて見える英語」から「自然な英語」へ
6. 二段階の英語化の意義

新宗教における二段階の英語化
－SGI-USA の事例から－

川端　亮

1．はじめに

本稿は、言語・文化・伝統の異なる海外において、日本の新宗教が受け入れられた過程の中で、教典や教団の機関紙誌の翻訳がどのように進められたかについて、アメリカ合衆国での創価学会を事例として検討するものである[1)]。

創価学会は、公称信者数およそ 800 万世帯で、日本最大の新宗教である。そして、海外での布教ももっとも進んでいる教団の一つである。海外をふくめたその組織である SGI（Soka Gakkai International）は、世界 192 カ国・地域に、1,200 万人の会員を擁している。ヨーロッパは十万人弱と推測され、インドや韓国は数十万人から百万人程度とかなりの規模で会員が広がっている。

アメリカ合衆国の SGI の組織を本稿では、SGI-USA と略称する。アメリカは、最初の海外布教地であり、現在のアメリカの会員数は、11 万人強である。そして、その会員の多くが、日本人や日系人ではなく、日本語とは縁のないアメリカ人である。

表１　日本人・日系人の割合の変化

	1960	1965	1970	1972	1979	1981
日本人、日系人	96	77	30	9.3	20.4	14
白人	3	14	41	54.6	52.9	55
アフリカ系	1	5	12	19.3	18.4	19
ラテン･アメリカ		3	13		3.9	
その他		1	4	3.3	4.4	12
調査人数				700	212	288

表１は、これまでの研究などから、日本人・日系人の割合を他の白人やアフリカ系アメリカ人などの会員の割合と比較したものである。教団の出版物によると、1960 年、65 年、70 年の日本人・日系人の割合は、96%、77%、30%となっており、10 年間で急激に減少していることがわかる（Williams 1972: Appendix 3 NSA Demographics）[2)]。その後

の研究者の調査では、1972 年に J. オーが西海岸、シカゴ、ニューヨークでランダムサンプリングによる調査を行い 1000 票を配布し、有効回答 700 を得ており、日本人・日系人は、9.3%となっている（Oh 1973: 174）[3)]。1979 年の Y. パークスの調査は、ロサンゼルスとニューヨークと南部の町で会員の会合に参加して配布され、回収された調査で、インタビュー結果も含むものである。この調査での日本人・日系人の割合は 20.4%である（Parks 1980: 346）[4)]。1981 年の井上順孝の調査は、カリフォルニアの会員からの回答によるもので、日系人の割合は 14%で、純然たる日系人の割合は 9%であるとしている（井上 1985)。調査対象地域や調査の規模は様々ではあるが、いずれにしても日系人の割合が 1970 年以降も 30%を上回ることはなかっただろう。P. ハモンドと D. マハチェクによる 1997 年の調査は、SGI-USA の 4 種類の出版物の予約購読者の名簿から無作為抽出し、郵送で行われた。その結果では、日本人は 15%であったが、調査票が英語であることから、日本人は回答してくれなかった可能性を考慮して、日本語を話す会員の数は、23%と推測されている（Hammond and Machacek 1999=2000: 43=65-6)。

以上のことから、SGI-USA は、1970 年代から日本人や日系人の日本語が中心ではなく、アメリカ人の英語が中心の組織であったといえだろう。

SGI のように海外で数万人以上の規模で現地の人々に信仰されている日本の宗教は（新宗教、伝統的な宗教を問わず)、数が少ない。とくにアメリカ合衆国では、SGI-USA がもっとも広く信仰されているといってよいだろう。つまり、SGI-USA は、日系人の枠を超えてアメリカに適応した数少ない日本の新宗教の一つである。SGI-USA が言語、文化、社会状況が異なるアメリカに適応できたのはなぜかという問いには、様々な観点から分析、考察する必要があり、すでに多くの研究がある。本稿ではその中で、言語の翻訳の問題に焦点を当て、基本的な問題を再考する。

第 2 節ではまず、SGI-USA の発展の過程を概観し、第 3 節では、なぜ翻訳を再び取り上げるのかを説明する。第 4 節では、英語への翻訳過程を 4 つのレベルに分けて紹介し、翻訳が、段階として前期と後期に分けられることを明らかにする。第 5 節では、前期と後期で、実際に翻訳がどのように異なるかを詳述する。最後にこの前期と後期の二段階の翻訳が果たした役割、とくに後期の翻訳が教団の発展過程に与えた意義についてまとめたい。

2．SGI-USA の発展の過程

まずはじめに、SGI-USA の歴史を略述しよう。1970 年代後半のハワイと西海岸の布教を調査した井上（1985: 152-208）と 1990 年代前半に調査をした中野毅と栗津賢太（1997: 197-8）を参考に、本稿では、次の 4 つの時期に分ける。

初期開教期（1960 年代前半まで）

発展期（1960 年代後半から 1976 年頃まで）

停滞期（1976 年頃から 80 年代まで）

転換期（1990 年以降）

初期開教期（1960 年代前半まで）の信仰の中心的な担い手は、日本に駐留したアメリカ軍人と知り合い、結婚した日本人女性である。彼女たちは、その後の夫の帰国に伴いアメリカに移動し、そこで信仰を続けていた。とくに 1960 年以前はアメリカには創価学会としての組織はなく、個人個人がばらばらで活動しているに等しい状態で、会員は、近くにもあるいはアメリカ全土にもどれくらいの同信の会員がいるかもわからず、お互いの接触もほとんどないような状態であった。

1960 年、創価学会の第三代会長に就任した池田大作は、アメリカを初めて訪問し、組織化が図られた。10 月にハワイからサンフランシスコ、シアトル、シカゴ、ニューヨーク、ワシントン DC、ロサンゼルスを訪問する。そして、ハワイ、サンフランシスコ、ネバダ、シアトル、シカゴ、ケンタッキー、ワシントン、ニューヨークに地区が結成され、ロサンゼルスに支部が結成された [5)]。当時のメンバーの数はおよそ 300 世帯だったという。1 年後の 1961 年には、2,000 世帯になった（井上 1985: 156）。その後組織は発展し、1963 年には、法人格を取得し、Soka Gakkai of America という名称になった。また、初めてイースト・ロサンゼルスに会館を所有した。ここは、アメリカ最大の日本人コミュニティとして有名なリトルトーキョーの東側にあり、当時の主要なメンバーが日本人であったことを物語っている。

1966 年に Nichiren Shoshu of America という名称に変更になるが [6)]、この頃から日本人以外の白人などの入会が増えていき、発展期（1960 年代後半から 1976 年頃まで）に入っていく。この発展期には、人の集まる街頭で声をかけたり、飲食店で声をかけるストリート折伏と、アメリカ社会のカウンター・カルチャーの流行によって、多くの白人、とくにヒッピーが入会するのが特徴である。

当時は、毎日、毎晩、街頭に出て、折伏を行っていた。このストリート折伏は、1960 年代後半から盛んに行われ、1970 年代の後半など、組織的には下火になる時期があったり、広いアメリカ全土の中で地域によって盛んだったり、名称が異なったりもしたが、最終的には 1980 年代終わりまで続く。1960 年代のストリート折伏では、日本からの観光客やビジネスマンなども入会したが、ほとんどが若いヒッピーだったという。この頃のヒッピーの会員の中に占める割合は、6 割から 7 割ともいわれた。この頃は、1 ヶ月に 50 人以上も折伏する人もたくさんおり、それくらい折伏は盛んであったし、入会する人も多かった。

1966 年頃にはヒッピーが増えて、ロサンゼルスのサンタモニカでも座談会が行われていた。そして、1968 年には、サンタモニカの海岸線に沿ったところに会館は移動する。

ストリート折伏は、大量に入会者を得るが、かなりの数が脱会したため [7)]、当時の会員数を正確に把握することは難しい。1965 年から 1969 年にかけて会員数は 3 万人から 17 万人に増加したと書かれたものもある（Parks 1980: 340）。急激な増加は 1970 年代半

ばまで続いたのは確かであろう。

この時期の特徴的な活動にコンベンションがある。かつて日本の創価学会は、青年平和文化祭など、多くの会員が踊りやマスゲームを披露する文化祭が開催されていた。創価学会の青年部では、情熱的な当時の活動の思い出を、地上 9 メートルの人間による「六段円塔」でもって語られたりする。このように多数の会員が集まって、文化的、運動会的な催しをすることを SGI ではコンベンションと呼び、1963 年にシカゴで開催された最初のコンベンションから 1989 年の総会形式のコンベンションまで毎年のように開催されてきた。とくに 1975 年のハワイ・コンベンションや 76 年のアメリカ建国 200 年を祝って、ボストン、フィラデルフィア、ニューヨークの 3 都市で開催されたコンベンションは、大規模なものであった。しかし、一方でその頃から停滞期に入る。

1976 年から路線が変更され、とくに 79 年までの時期は「第二章（phase Ⅱ）」と呼ばれる。それまでのコンベンションやストリート折伏による集権的組織による拡大路線から、運営面や活動面を民主的運営に変え、メンバーの自発的信仰による人間革命を目指す路線へと変更されたという（ウィリアムス 1989: 273-311、Parks 1985: 153-213、Hurst 1992: 228-33）。

「第二章」では、会員数は急激に減少する。パークスによると、1970 年代初めには、5 万人、1970 年代半ばには 6 万人の活動的なメンバーがいたが、1979 年には 3 万人に減少したという。1976 年からリーダーたちは折伏に力を入れなくなる。その結果、それまでは入会して 1 年未満のメンバーが 3 割近く、1〜3 年のメンバーが 5 割程度いたが、1979 年には会員歴 1 年未満のメンバーが 2.4%、1〜3 年のメンバーが 19.6%にまで減っている（Parks 1980: 342-3）。井上もまた、1977 年頃を境にストリート折伏は中止されたという。1973 年から 1976 年までは、少なくとも毎月 1,500 世帯から 3,000 世帯が折伏によって入会していたが、1977 年の 9 月から 12 月までの 3 ヶ月で 775 世帯しか入会していないと報告している（井上 1985: 191-2）。

第二章は 1976 年頃から 1980 年代始め頃までをさすが、この停滞期は 80 年代に入ってすぐに終わるのではなく、その後約 10 年続く。1980 年代には、ストリート折伏が復活したり、会員数が増加した時期もあり、10 年以上会員数が減少し続けたわけではないが、組織として新たな段階に入ったといい得るのは、1990 年からである。

1990 年、池田大作がロサンゼルスに 17 日間滞在し、連日会合を開いて指導を行った。そして 1990 年代初めから現在に至る転換期によって、会員数は回復、増加に向かう。90 年代以降の変更点を中野・粟津（1996）では、以下の 4 点にまとめている。ストリート折伏は中止され、友人知人に対する対話形式の布教方法に変更したこと、文化人の会員を主体とする文化本部が結成されたように、教団組織の構造を重層的に構成し直し、各部独自の活動が展開され、幅広い層から会員を集めるようになったこと、上意下達的な意思伝達方法から一般会員の意見を地域組織の運動に反映する方法の確立を目指すようになったこと、そして最後に日本の文化的要素を極力排除し、アメリカの青少年が

違和感なく参加できる「アメリカ仏教」の樹立を模索するという転換である。

1990 年代後半の SGI を調査したハモンドとマハチェクは、出版物の予約購読数と 1 世帯あたりの会員数をかなり厳密に推測して、1997 年頃、会員数は 35,000 人を超えると推定している（Hammond and Machacek 1999=2000: 42=63-4)。その後の 10 年間は、会員数が増加し、SGI 本部で把握している現在の会員数は 11 万人強である。86 の総合本部（region）があり、本部（area）は 287、支部（chapter）は 916、地区（district）の数は 2,918 である（2009 年 6 月現在）[8)]。

3．翻訳の重要性再考

海外への日本の新宗教の布教の研究において、翻訳の重要性は、当然のことながら、多くの先行研究で指摘されている。中牧弘允（1986）では、ブラジルで PL 教団が受容された要因として、1960 年代後半からポルトガル語の布教へと切り換えられ、現地の言語の使用が進んだこと、たとえば正座から椅子への変化のように、儀礼の細部などを現地の生活様式に合わせたこと、現地人の役職への登用、ブラジル人のメンバーに対して、きめ細かい生活指導をしたことなどをあげている。ブラジルの SGI については、1960 年代後半には、ポルトガル語が主体となったこと、そこには二世が通訳として活躍したこと、さらにはカトリック社会なので、結婚式や葬式などをカトリック教会で行うことに対して寛容な方針をとったこと、座談会や個人指導、家庭訪問によって、信心の持続と定着を図ったこと、役職による人材育成、文化活動による人材育成が有効に機能したことなどがあげられている（渡辺 2001）。アメリカの SGI については、井上は、1967 年頃には種々の活動において英語が第一言語となったことが指摘され、1960 年代にアメリカの若者たちの間にカウンター・カルチャーが流行し東洋宗教への関心が高まったこと、ストリート折伏や NSA セミナーという布教方法、多民族、様々な階層の人びとが座談会などで集まることに魅力があったことや座談会での人びとの暖かさ、御利益信仰と人間革命、ハッピー信仰が受け入れられたことなどを指摘している（井上 1985: 164-86）。アメリカ人の研究者である J. ハーストも 1963 年に英語で座談会が初めて開催されたことをアメリカ人への布教の重要なステップとしてあげており（1992: 142）、ハモンド・マハチェクにおいても、ハーストを引用して英語での会合開催をあげているほか、アメリカの教会組織に倣った組織形態に変え、女性を登用するなどアメリカで重視される価値観に沿った形に変更したことでアメリカ文化に適応しようとしたという供給側の要因とともに、受容するアメリカ側の要因として、移民政策の変更や宗教的多元主義という社会状況が好都合であったこと、創価学会の超近代主義的な価値観がアメリカ社会に受け入れられたことなどをあげている（1999=2000）。

これらの主要な研究のいずれにおいても早くからの英語の使用があげられており、SGI がアメリカ人の会員を獲得した根本的な要因の一つといえるであろう。SGI-USA は、

1960 年代初頭から英語化を図った。先行研究に従えば、英語化によってスムーズに受容が促進されるはずである。しかし、1970 年代後半に SGI-USA は、「第二章」と呼ばれる局面を経験し、会員数は減少する。つまり、受容は促進されず、阻まれるのである。

もちろん、英語化だけですべてが説明されるわけではないだろう。「第二章」では、1960 年代半ば以降に大量に入会したアメリカ人の若者が脱会する。彼らは支部長などの役職に就いていたため、組織としてはリーダー不在の状態となり、活動が停滞した。第二章以前においては、連日連夜、ストリート折伏が行われていたが、その活動をになった青年層は、まだ結婚しておらず、大学生などであった。彼らが青年期であったことが、深夜 2 時までバーを廻って折伏をすることを可能にした。しかし、1970 年代半ばは、彼らが結婚しフルタイムの職に就くようになった時期である。したがって、多くの会員がその家庭環境の変化から深夜までのストリート折伏ができなくなった時期にあたる（Hammond and Machacek 1999=2000: 47=70)。

そのような状況に加えて、組織の上層のリーダーは日本人、しかも男性ばかりが占め続けていることや、多大な労力と時間を費やすコンベンションに対して教団が示す意義に疑問を呈したり、反発もあり、また集会では男女別々に座ることなどに代表される日本的な文化が無意味に残っているように思われたことなどが、第二章につながったのではないかと思われる[9)]。

以上のように、第二章の原因については、様々な観点から検討することが必要であるが、本稿では英語化が不十分であったことも、第二章の原因の一つに挙げられるのではないかと考えるものである。1960 年代半ば以降、ベビーブーム世代であるヒッピー層が大量に入会し、支部長などの地域組織のリーダーになっていた。これは急激な会員増によって、地区や支部の数も急激に増えて[10)]、信仰年数が短い会員も地区や支部ではリーダーに登用せざるを得なかったためでもある。彼らが十分に信仰を深めておれば、どのような社会状況、ライフサイクルの変化があっても、信仰を続け、リーダーとして会員をまとめ続けることができたのではないか。しかし、当時、多くを占めた若いアメリカ人のメンバーは、体験的、直感的には理解できても十分に英語化されたテキストがなかったため、教学としての理解が十分にできなかったのではないだろうか。宗教の理解に体験的な理解も重要ではあるが、それに伴って、教学的な理解も必要であろう。体験的理解と教学的理解がバランスよくできていなかったため、創価学会の教えの本質の部分が若者たちに伝わっておらず、大量に脱会するという事態を招いたのではないだろうか。

つまり、1970 年代までの英語化だけでは不十分だったため、1970 年代後半からの停滞期が生じたのではないだろうか。したがって、日本宗教がアメリカに根づく要因を探求する際、翻訳が重要であることはまちがいないが、単にいつから現地語への翻訳が始まったかだけに注目するのでは不十分である。そこで、いくつかのレベルに分けて、80 年代以降のプロセスも含めて検討する。

4．翻訳の4つのレベル

本稿では、英語使用のレベルを以下の4つに分けてみていく。

1）会員間のコミュニケーションである座談会などの会合のレベル

2）会員が日々接するものとしての機関紙誌のレベル

3）池田大作の著作のレベル

4）御書や辞書などの教義のレベル

以上の4つである。1)のレベルよりも4)のレベルの方が、教団としてはより公式的な形式の文書である。

1) 会合のレベル

私たちの調査から初期の英語の使用の状況について描いてみよう。

1960年にアメリカに渡ったといえる創価学会において、会合で英語が使われるようになった時期はかなり早く、またかなり急速に英語が用いられるようになっていく。1963年、イースト・ロサンゼルスに会館が建設され、ここで英語の会合が定期的に行われるようになった。その他の場所では毎週英語で会合が開かれるのではなかった。英語を話すことができる日系人が、数カ所を一週間ごとに順番に廻るという形で行われていた。したがって、日本語がわからない会員は、いつも同じ場所の会合に参加するのではなく、みんなで車に乗って、今週はロングビーチ、来週はガーデナーというように、英語の会合が開かれる場所で参加していたという。また、1963年には英語の教学試験も実施されたという。しかし、当時は、おそらくまだ多くの会合は日本語あるいは日本語に英語が混じったものが使われていたと思われる。

1967年頃の本部幹部会においても、英語と日本語がいりまじっていたという。それは、体験談でも人事の発表でも、発表する人が自分の話しやすい言語で話していたからで、日本人は日本語で話し、アメリカ人は英語で話していたという。

アメリカ人が増えて、主要な言語が日本語から英語に変わっていったと考えるならば、1970年には、日本人の会員は3割に、アメリカ人の会員は7割に達するようになったので、この頃には会合は英語化されたといってよいのではないかと思われる。

聖典の講義も1963年頃から毎月1回、イースト・ロサンゼルスの会館で、英語でも行われるようになった（日本語の講義もあった）。1967年には英語の講義の参加者が増え、イースト・ロサンゼルスの会館では収容しきれなくなって、外の会場を借りるようになった。また、最初の頃は、二世など年長の英語がわかる人が多かったが、1968年頃には、大学生など若者が多くなっていった。

会員以外を対象とした講義に類するものとして、NSAセミナーがある。初代理事長は、貞永昌靖（さだながまさやす）（1971年にウィリアムスと改名）が1968年から1974年まで、アメリカ全土の大学で行ったものである。セミナーは、1968年にはカリフォルニア州立大学ロサンゼルス校、オハイオ州のウェスタン・カレッジ、カリフォルニア州立大学バークレー校でセ

ミナーが開催された（Williams 1972: 45-6）。1969 年には 15 の大学、1970 年には 25 大学、1971 年 26 大学、1972 年 6 大学と続けられた。バークレーでは、1973 年に 4 度目のセミナーが開かれるなど、複数回のセミナーが行われた大学も 10 大学以上に上り、ハーバードやスタンフォードなどの有名大学でも開かれている（Williams 1974: 8-11）。この NSA セミナーは、数百人規模の多くの学生を集めたこともあったようで、セミナーを通じて入会した人もいたという。

初期の段階では、英語も日本語も話せる日系人の働きも強調される。しかし彼らも必ずしも完全なバイリンガルではない。自分たちが理解したことをたとえ話や身振り手振りも交えてアメリカ人に説明し、そのような彼らの働きの結果、アメリカ人は仏法を理解し始めるのである。もちろん、仏法の理解には英語のテキストは不可欠ではあるが、初期のアメリカ人のメンバーの日蓮仏法の理解は、体験主義的にならざるを得ず、多くは体験を通して、そして心で感じたものを通して理解していくという形をとったと思われる。そしてそれが初期には非常に重要であった。

前節に引用した先行研究のほとんどは、この時期の英語化について触れている。

2) 機関紙誌

定期的な英語の印刷物のもっとも最初のものは、機関誌の *The Seikyo News* である。*The Seikyo News* は、1962 年 5 月 15 日発刊で、当初は月 2 回、その後、1963 年 5 月から月 4 回月曜日の発行になる。紙面は基本的に 4 ページだが、正月などの特別なときは、8 ページになることもあった。これは、日本の創価学会で制作され、アメリカへ、またアメリカだけでなく世界中の SGI メンバーが購読したものである。この *The Seikyo News* は、1965 年 9 月 14 日発行の 145 号が最終号となる。

The Seikyo News に代わって発行されたのが *World Tribune* である。これは、*The Seikyo News* が終わる少し前、1964 年 8 月 15 日に第 1 号が発刊された週刊の新聞であった。4 ページまたは 6 ページで、最後のページは日本語であった。これは、*The Seikyo News* と異なり、アメリカだけに配布された新聞であった。印刷された *World Tribune* は、支部にまとめて送られ、そこからメンバーが配布をしたという。*World Tribune* は、ロサンゼルスの制作ではあったが、英語のページを書いていたのは、当時でアメリカでの滞在歴が 5 年ほどになる日本人であった。彼が紙面を埋める英語の文章を考えるのに 24 時間くらいかかったという。その英語を会員の日系人や、奥さんが会員で新聞発行を仕事としていたアメリカ人に手伝ってもらって、書き直すという作業を行っていた。

1965 年には週に 2 回の発行となり、1967 年からは週に 3 回、1975 年に月曜日から金曜日までの週に 5 回発行となるが、1977 年に週に 2 回、1978 年に週に 1 回となり、現在に至っている。日本語のページは、1970 年代半ばになくなり、すべて英語になる。

月刊誌 *Seikyo Times* は、1965 年 1 月発刊（10 月より月に 3 回の発行になる）で、これは日本で制作されていた。これらの主要な印刷物は、いずれも 1960 年代に発刊されてお

り、またその頻度も 70 年代半ばの *World Tribune* は週に 5 回発行であり、1970 年代末の停滞期に入る前にすでに英語の印刷物はかなりの量が出版されていたといえるだろう。

機関誌のその後の質的な変遷が、本稿で特に注目する点である。

1973 年から 1977 年には、季刊誌 *NSA Quarterly* が発行される。注目すべき点は、これがアメリカ人が寄稿して、ロサンゼルスで発行された、アメリカ人の手になる印刷物であることである。そして、月刊誌 *Seikyo Times* も 1981 年 6 月からロサンゼルスで制作されるようになり、アメリカ人が書いた英語が中心になる。その後、1997 年 1 月に *Seikyo Times* は月刊の *Living BUDDHISM* になり、2006 年から隔月発行になる。

ここで、機関紙誌を現地で編集・発行する意義を確認しておこう。まず、英語がアメリカ人にわかりやすいものとなったことが挙げられる。それ以前の印刷物は、日本人が英語に訳していた。しかし、アメリカ人が日本語から英語に訳した方が、わかりやすい英語になる。これは、私たち日本人が日本語を英語に訳した場合と、英語を日本語に翻訳した場合では、どちらが自然な言葉に訳せるかを考えれば、明らかであろう。

言語の面だけでなく、内容がわかりやすいというメリットも挙げられる。つまり、日本人の日本での体験談、あるいは日本人のアメリカでの体験談ではなく、アメリカ人のアメリカ人の生活に密着する体験談がより多く掲載されるのである。たとえば、ロサンゼルスで初めて編集・発行された 1981 年 6 月の *Seikyo Times* に掲載されている体験談の 1 つを要約すると、以下のようになる。

> 父は数学の教授で、子どもをハーバードへやるのが、夢だった。兄弟は、成績もよかったが、ヒッピーの時代でストリートギャングになり、ドラッグにおぼれ、家族はめちゃめちゃになった。そこから題目をあげるようになる。初めは、朝はフリーウェイをドライブ中に題目をあげ、昼休みにパーキングで題目をあげたりするが、やがてご本尊の前で題目をあげることができるようになる...（*Seikyo Times* 1981 June 54-55）

ヒッピーの時代や車社会など、アメリカの時代背景、社会状況に密着した体験談は、アメリカの会員にとっても共感しやすいだろう[11)]。

3) 池田大作の著作

会員は新聞や月刊の雑誌によって、日々教えに接し、教えを学ぶが、それ以外にも書籍によって学ぶ。創価学会の場合、池田大作の著作や対談集が多数出版され、多くの会員が読んでいる。SGI-USA においても、現在では日本の創価学会と同じように、定期的な印刷物以外にも池田大作の著作が会員の教えを勉強する教材となっている。これらは少しずつ翻訳され、*Seikyo Times* 等に部分的に掲載された後に単行本となって出版されることが多い。池田の著作でもっとも有名で、おそらく会員にもっとも読まれている『人間革命』（*The Human Revolution*）も最初に英語に翻訳されたのは、1965 年の *Seikyo Times*（vol.1 No.3）で、単行本としての最初の英語での出版も 1965 年と早い時期である。し

かしこの時は、5 巻まで出版された後、諸事情により完結しないで終わり、1972 年 *The Human Revolution* が新たに出版され、1999 年に 12 巻本として完結した。

それ以外の池田大作の著作、対談集などの英訳出版は、1970 年代後半から始まる。1970 年代後半には、6 冊が翻訳され、1980 年代前半には 4 冊、1980 年代後半は 5 冊であるが、1990 年代にはいると 14 冊、2000 年代には 22 冊というように、1970 年代後半から英訳が増え、90 年代以降はその量は豊富になる。

4) 聖典の翻訳

最後に創価学会が聖典とする「御書」(『日蓮大聖人御書全集』) の英訳についてみてみる。最初の御書の翻訳は 1966 年の *Seikyo Times* 7 月号に掲載された「経王殿御返事」である。その後、各篇が *Seikyo Times* に順次掲載され、書籍としての「御書」は、*The major Writings of Nichiren Daishonin*（『英文御書解説』）としてまとめられ、1979 年に第 1 巻が発刊され、1994 年に第 7 巻が出版されて、合計 172 編の御書の翻訳が完成した。

その後、翻訳の正確を期すること、引用文の統一、用語の再検討などを目的とした改訂版の出版が企画され、1999 年に *The Writings of Nichiren Daishonin*（『英訳御書』）第 1 巻、2006 年に同第 2 巻が出版され、2 巻本として完結する。第 1 巻で、日本語で残っているのは、固有名詞を除くと「ご本尊」、「題目」、「摂受」、「折伏」だけといわれている。

また、御書を読む上で、また日々の信仰においても必要な仏教用語の辞典としては、1983 年 *A Dictionary of Buddhist Terms and Concepts* が出版され、2002 年には、改訂版の *The Soka Gakkai Dictionary of Buddhism* が出版される。これらの聖典や辞典に関しては、日本語に精通したアメリカ人の SGI 職員やアメリカ人の法華経典の専門家の協力も得ながら、日本で英訳・改訂は行われている。

以上みてきたように、会合だけでなく、機関紙誌においても、池田の著作の出版においても、御書の翻訳においても、1960 年代には英訳が始まり、出版される。しかし、それらの多くは、1980 年代に入って、アメリカで出版されるようになったり、改訂されたりするのである。

5．「日本語が透けて見える英語」から「自然な英語」へ

印刷物は、大まかにいえば、1960-70 年代は、日本で日本人が翻訳し、出版していた。現在でも聖典の翻訳のように、日本が中心ではあるが、1980 年代より、ネイティブが関わる部分が増え、彼らが直接翻訳したアメリカ人が読みやすい英語が増えてきたことは間違いないだろう。この節では、その翻訳の違いを具体的な例を挙げてみてみよう。

まず、日本語の用語がそのままローマ字で書き表されて、使われているケースがある。もっとも代表的な例である「ご本尊」という言葉は、現在でも Gohonzon とローマ字での表記が残っている言葉である。この言葉の訳として、1960 年代から the object of worship

という言葉が使われていた。それが、2002年出版の *The Soka Gakkai Dictionary of Buddhism* では、the object of devotion という言葉が使われるようになる。1981 年のロサンゼルスで編集／発行が始まる直前の *Seikyo Times* の 4・5 月合併号では、Gohonzon が 136 回使われており、the object of worship も 10 回使われているが、the object of devotion は、1 回も使われていない。1981 年前半の *Seikyo Times* をみると、現在の英訳の御書 *The Writings of Nichiren Daishonin* でもローマ字表記で残されている「題目」、「折伏」が数多くみられるのは当然として、「一念三千」、「随方毘尼」、「異体同心」などがこの時点でもローマ字読みで残されているのをみることができる。

「一念三千」、「随方毘尼」、「異体同心」などの言葉は、ローマ字読みで残る一方で、英語も平行して使われてきた。しかし、その訳語は変化している。

「一念三千」は、1972 年の *Seikyo Times* 10 月号（No.136）では、

> The 3,000 worlds in a momentary existence of life.

とされていたが、1983 年 （*A Dictionary of Buddhist Terms and Concepts*）には、

> A single life-moment possesses three thousand realms.

となり、2002 年の *The Soka Gakkai Dictionary of Buddhism* では、

> three thousand realms in a single moment of life

となる。

「随方毘尼」は、海外での布教においてはよく使われた言葉である。1972 年の *Seikyo Times* 4 月号（No.130）では、

> Zuiho means to follow the customs and traditions of a particular area, while Bini means precepts or commandment.

という、随方は○○、毘尼は○○という、日本人にはわかりやすい、あるいはいかにも日本人が訳しやすいような翻訳になっている。しかし、随方毘尼は漢字 4 文字であるが、この訳では、18 ワードである。これが、2002 年の *The Soka Gakkai Dictionary of Buddhism* においては、

> precept of adapting to local customs

のわずか 6 ワードとなるのである。

「煩悩即菩提」は、1960 年代の *Seikyo Times* においては、

> The important Buddhist principle in which Bonno (earthly desires, worldly principle etc. -the cause of unhappiness) is changed into Bodai (satisfaction, enlightenment, etc. -the effect of happiness). （*Seikyo Times* 1967, No.21）

という、煩悩が菩提になるというような感じの説明的な英語訳である。これが、1983 年の *A Dictionary of Buddhist Terms and Concepts* においては、

> earthly desires are enlightenment

となるのである。仏教用語には、「即」という言葉がよく使われ、これは今日の創価学会の公式の翻訳においては、be 動詞があてられることになっており、機関誌や池田のス

ピーチなどで御書を引用する場合には、英語の出版物では、この be 動詞を用いた訳が用いられる。しかし、これだけでは初心者にはわかりにくいだろう。そこで、御書というきわめて公式的なレベルではなく、より日常的なレベルにおいては、すなわち機関誌や会員が初心者に説明する場面などにおいては、

earthly desires lead to enlightenment
earthly desires springboard to enlightenment

など、動詞の部分の意味がよりわかりやすい翻訳も使われている。

「異体同心」は、古い時代の *Seikyo Times* （1972 年）においては、

> Means that, though different from each other in physical and social terms, all Nichiren Shoshu members share the same objective. They have the same faith –faith in the Gohonzon – and aim at the common goal of Kosen-rufu, while developing individual potentials. （*Seikyo Times* 1972, No.134）

と訳されている。それが、2002 年の *The Soka Gakkai Dictionary of Buddhism* においては、Many in body, one in mind と訳されるようになった。しかしこの訳も完全というわけではなく、議論が多いものである。とくに one in mind の部分は英語ネイティブの人からクレームがつくことが多い部分で、マインドコントロールの連想などから盲信、妄信をイメージしたり、文脈によっては、ナチスをイメージするというクレームもあるという。また、many in body の部分も many では、単に数が多いという感じで、エスニシティがアメリカほど多様でない日本国内では many でもよいが、エスニシティも階層的にも多様なアメリカなどでは many に加えて、different のニュアンスがあった方がよいという。これらの議論を踏まえて現在では、より日常的なレベルでは、異体同心は、Unity in diversity が使われることも多いという。

異体同心を巡る詳細な議論を知ると、英語への翻訳は、特に宗教的な深い意味を伝えるためには、非常に難しく、まだまだこれからも翻訳は洗練されていかなければならないことがよく分かる。それを考えればますます、1960 年代、70 年代に翻訳に携わっていた日本人たちの翻訳が、十分ではなかったことは当然すぎるほどのことであり、従来の宗教研究でこの前期の翻訳でもって、英語化が行われていたと判断するのは、部分的、表面的といえるだろう。

6．二段階の英語化の意義

SGI-USA にとって重要な英語への翻訳は、60 年代に始まる初期の翻訳から 80 年代以降現在に至るまでの翻訳で、日本人の翻訳からアメリカ人ネイティブの翻訳へと担い手が代わり、それによって、日本語が透けて見える英語から自然な英語へと変化したといえるであろう。この変化を本稿では、二段階の英語化と考える。

この二段階の英語化は、翻訳にアメリカ人の協力を得て、翻訳のレベルが向上したと

いうことが第一義的に重要であるが、もう一点、忘れてはならないことがある。それは、二段階の英語化によって、たとえば「煩悩即涅槃」や「異体同心」のように、会合での会話レベルの翻訳から、機関紙誌、池田の著作、御書のレベルのそれぞれに応じて、翻訳語が異なる場合があり、複数レベルでの異なる翻訳によって、複雑な教えの意味を重層的に伝えることが可能となったことである。この重層的な翻訳によって、会員にとっても自分たちのレベルによって、あるいは状況によって、異なる翻訳を選択して学習することが可能となったのである。

創価学会といえば、勤行や題目をすぐに思い浮かべるが、日蓮仏法では「信・行・学」が説かれている。教学の重要性は、信や行とともに御書を読むことを中心に、正しい仏法を学ぶことが重視され、また学によって信が確立され、正しく行ができるとされている。

二段階の英語化が 1980 年代に進んで初めて、アメリカ人にとって「信・行・学」が確立し、深くその仏法を理解できるようになったのではないだろうか。第二章で多くの地域のリーダーが脱会したが、二段階の英語化をへて、仏法を理解した人材が育成された。その結果、1990 年代にはアメリカ全国レベルの役職に、日本語を理解できないアメリカ人であっても、無理なく就任できるようになったのではないだろうか。

SGI-USA の組織は、日本の創価学会と同じく男子部、女子部があってそれを束ねる青年部があり、結婚したり年齢を重ねると壮年部、婦人部に移行する。それぞれ男子部長、女子部長、青年部長、壮年部長、婦人部長が支部やエリア、リージョンごとにおかれ、全国レベルのそれぞれの部長と理事長がいる。これらの全国レベルの長をみてみると、1976 年までは日本人がそれらのポストを占め（青年部長は 1988 年まで、壮年部長は 1989 年までおかれない）、1977 年の第二章の頃に初めてアメリカ人が男子部長、女子部長になる。しかし、1982 年にはこれら 2 つの部長も再び日本人に戻る。その後、1989 年に男子部長、1992 年に女子部長、1993 年に青年部長、1999 年に壮年部長と婦人部長がアメリカ人になり、その後も現在に至るまでずっとアメリカ人が各部長を務めている。1990 年代に入ってからアメリカ人の全国レベルへの役職への登用が本格化したと言えるだろう。

従来の研究で SGI がアメリカ化した要因としてあげられる言語の問題の他、椅子に座ることなどの日本的慣行の廃止や座談会の魅力、アメリカ人の役職への登用などの多くの点は、1970 年代後半に始まる第二章の頃にはほぼ実現していた。本稿の言語の例で示したように、これらの要因も詳細に再検討する必要があるかもしれない。

付記

調査にご協力いただいた SGI-USA の幹部、創価学会国際広報局国際広報部の方々、多くの会員の方々に感謝申し上げます。

注

1） 本稿は、2005 年からのハワイ、ロサンゼルス、ニューヨーク、シカゴなどの SGI-USA での調査に基づくものである。この調査は、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「日本型新宗教のアメリカ合衆国における受容－グローバリゼーション下の SGI の展開」（課題番号 20402039）によるものであり、研究代表者である大阪府立大学秋庭裕、分担者の神戸大学稲場圭信との共同研究の成果の一部である。

2） これらの教団の資料では、「日本人・日系人」とは表記されておらず、東洋系やアジア系という言葉が使われている。しかし、この当時においては、実際には日本人・日系人と考えてよいだろう。

3） この調査で日本人・日系人にあたるカテゴリーは、「モンゴロイド」である。また、13.5%の無回答があることに注意しなければならない。

4） パークスの論文では、表では「東洋系」というカテゴリーで 20.4%という数字が示してあるが、本文中では、「日本人」という書き方がされている。

5） SGI も創価学会と同じような信者組織になっており、20 人程度の会員が地区を構成し、地区が集まって支部、さらには本部、総合本部を構成する。1960 年のアメリカ訪問に際しては、カナダのトロント、ブラジルのサンパウロも途中で訪問しており、これらの地域も合わせて、合計 2 支部、17 地区が結成された。

6） 正式名称は、1973 年に Nichiren Shoshu Academy、1979 年に Nichiren Shoshu of America となり、1980 年に Nichiren Shoshu Soka Gakkai of America、1991 年に Soka Gakai International USA となって、現在に至っている。アメリカの創価学会は、1966 年から 1970 年代の頭文字をとって NSA と略称されることが多く、本稿で引用する先行研究の多くも NSA という略称を使っているが、本稿では SGI-USA に統一する。

7） 井上によると、1973 年の 4 月からの 1 年間で、約 3 万世帯が入会したが、同じ時期に約 1 万 3 千世帯が脱会したという（井上 1985: 191）

8） SGI-USA が公表した初期の会員数は、入会手続きを行った人の累計数であったが、現在は、日常的に地区組織に所属して活動に参加している会員数を掌握する「統監システム（statistics record）」によって把握されている数である。

9） 当時の理事長であるウィリアムスは、「第二章」は日本の創価学会の路線変更の影響を受けた面があったが、日本とアメリカでは組織の発展段階が大きく異なっていたため、組織は混乱したという（ウィリアムス 1989: 273-311）。パークスは、この停滞期について、アメリカ化の進展から述べている。SGI は 1970 年代の終わり頃までに、若い人々が主導してアメリカ化の第三段階に入ったという。ニューヨークで何人かのメンバーが造反したが、1979 年には日本人とアメリカ人のリーダーが協力して、より発展できる方法の模索に入ったとしている（Parks 1980: 341）。

10） SGI-USA 提供の資料では、1965 年には 88 であった地区の数は 1976 年には、930 になっている。支部の数も 23 から 305 に増えている。

11）中牧は、ブラジルの PL 教団の布教の中で、二代教主の著作のポルトガル語訳においては、登場する日本人の人名がポルトガル人にわかりやすい人に、たとえば、野球の王・長島が引用されるときは、サッカーのペレとソクラテスに置き換えられていることなどが示されている（中牧 1986 154-8）。

参考文献

Hammond, P., and D. Machacek（1999）*Soka Gakkai in America: Accommodation and Conversion.* New York: Oxford University Press.（栗原淑江（訳）(2000)『アメリカの創価学会―適応と転換をめぐる社会学的考察』紀伊國屋書店。

Hurst, Jane（1992） *Nichiren Shoshu Buddhism and the Soka Gakkai in America: The Ethos of a New Religious Movement.* New York: Garland.

井上順孝（1985)『海を渡った日本宗教－移民社会の内と外』弘文堂。

中野毅・栗津賢太（1996)「アメリカ合衆国およびメキシコ合衆国におけるＳＧＩ運動－現地調査報告(1)－」『比較文化研究』14 巻、155-203。

中牧弘允（1986)『新世界の日本宗教－日本の神々と異文明』平凡社。

Oh, John K.（1973） “The Nichiren Shoshu of America.” *Review of Religious Research* 14: 169-77.

Parks, Yoko Yamamoto（1980） “Nichiren Shōshū Academy in America: Changes during the 1970s.” *Japanese Journal of Religious Studies* 7 (4): 337-55.

――――（1985）*Chanting is efficacious: Changes in the Organization and Beliefs of the American Sokagakkai.* U.M.I. Dessertation Information Service.

渡辺雅子（2001)『ブラジル日系新宗教の展開－異文化布教の課題と実践』東信堂。

Williams, George M. （1972） *NSA Seminar Report 1968-71*. Santa Monica: World Tribune Press.

Williams, George M. （1974） *NSA Seminars: An Introduction to True Buddhism*. Santa Monica: World Tribune Press.

ウィリアムス、G. M.（1989)『アメリカにおける宗教の役割』潮出版社。

Two-Stage Translation into English in a New Religion
－The Case of SGI-USA－

Akira KAWABATA

This paper examines the manner in which a new Japanese religion—Soka Gakkai—came to be accepted in the USA, especially focusing on Japanese to English translation of its doctrine writings and publications.

SGI (Soka Gakkai International) is the international organization of Soka Gakkai, the largest new religion in Japan. It has spread overseas among non-Japanese people for fifty years. SGI has 12 million members in 192 countries and areas, and most of its members in the USA are not Japanese.

Previous research has pointed out the factors underlying Soka Gakkai's popularity in the USA—use of the local language, adapting its religious ceremonies to local lifestyles, and assignment of the leadership positions to Americans. This paper focuses on reexamining the problem of translating the religion's literature from Japanese to English which has been raised previously.

I first present an overview of the history of SGI-USA, and then explain why I am taking up the issue of translation once again. The translation of Soka Gakkai's literature into English was underway in the 1960s and 1970s for the purpose of holding meetings and for publication. However, although SGI grew rapidly up till 1976, many young Americans subsequently left the group and membership stagnated. This is thought to be because the English translations were inadequate. Here I examine the differences between the English translations before and after this change, and discuss how these differences are related to SGI's next step in the 1990s.

More specifically, I divide the Japanese-to-English translation process into four levels. These are as follows: (1) The level of the discussion meetings that serve as a communication venue between members, (2) The level of publications read daily by SGI members, (3) The level of works written by Daisaku Ikeda, president of SGI, and (4) The level of the doctrine writings (Gosho) and Buddhist-term dictionaries. An examination of these levels shows that the English translation of all the levels was underway in the 1960s and 1970s. However, most of that material came to be translated or revised in the USA through the 1980s. In other words, the translation process can be divided into two phases: an early phase and a late phase.

During the early phase, the translation was done by the Japanese while it was carried out by native-speaking Americans during the late phase. As a result, the translations switched over from awkward translations that adhered too strongly to the original Japanese to more natural English. This paper regards this transition as a crucial turning point of the Japanese-to-English translation

process into two different stages. The most important point in this two-stage translation process was that the translation quality improved when the process was taken over by American translators. However, there is one additional point that must not be forgotten: the two distinct stages of the translation process have given rise to a discrepancy in the literature's wording depending on the levels — the conversational level of meetings, the level of publication, the level of Ikeda's works, or the level of Gosho. The second stage of translation began in the 1980s and made it possible for the Americans to understand the Soka Gakkai's teachings at a deeper level.